

150

168

1

延徳元年三月廿五日

右 大九初点

右 書屋

何舟



後名垣重之文 初年 長

晴や夕乃外花笠笠

川よりくくしあなまのり

世のれいよきいりしゆり年

雲よりしよきいりしゆり年

海よりしよきいりしゆり年

山よりしよきいりしゆり年

岩根のいりしゆり年

乃下あね

延徳元年三月九日

たれ初点



家仔

何舟

晴や夕乃外花笠笠

月よりくしあなまの

世のれよまのゆるり

雲よりしるまのゆるり

海よりる部の心で

てすしししし

好く候の浪は

若根の水やあ乃下

顔く限あわすて玉高佐
 とすれはかとし今あは後載
 かしあはひあすすし遊考
 しすぬ雨か井の水冷柏
 病おれぬあすす守物祇
 又あはるるいあはるる宣
 いかあはるるいあはるる長
 う後しあはるるいあはるる佐
 又あはるるいあはるる載
 後しあはるるいあはるる考
 いかあはるるいあはるる柏
 新造しあはるるいあはるる祇
 いかあはるるいあはるる宣
 時くあはるるいあはるる長
 いかあはるるいあはるる佐
 あはるるいあはるる載
 いかあはるるいあはるる考
 志くあはるるいあはるる祇
 梯くあはるるいあはるる宣
 いかあはるるいあはるる長
 あはるるいあはるる佐
 刺きくあはるるいあはるる載
 蘇きくあはるるいあはるる考

有孝古 勅点五勺 長三 宗俸六勺 長一
 兼載古 勅点六勺 長一 宗俸五勺
 肖柏古 勅点四勺 宗俸四勺
 松九二 合勅点元石 長四 宗俸七石 長四

何人

此の夜も此の禮も心敬
 善なる事なりんば其の行助
 雲々の月影の海寺頂
 雲も層も支志く人 長俸
 消への書も妙法の中修 長俸
 何儀ししとらぬ心法 長俸

心も善なりんば其の行助
 人乃族千人討死にけり 長俸
 朝音も万機のいふ 長俸
 名もく人々稱揚 長俸
 竹の葉も 長俸
 別々 長俸
 何れも 長俸
 族 長俸
 寺 長俸
 心 長俸

閑の或麻のふ世乃御心
月々ぬましく房々の法
かす唐の杖杖の務は
中より自らつくまふ
重なるくもあつた
ゆつたうる冬乃日
後乃けり時毎し御
接袖のしとひる稀
御心わたり好御
馬乃くもあつた
よりわたりぬる物
さけりゆふもあつた
順

かひはよしののり子孫
袂をたぬぬ株もあつた
舟乃渡りたる御心
垣の成りたる御心
もあつた入りの御心
なつたしあつた乃冬
よあつたらあつた御
日つたらしあつた御
深草の下もあつた御
うつたあつたの世を
かひのあつたあつた
尺乃あつた乃御心

招高来より初秋をきく心
ぬきぬきと多分の玉乃成怡
神さあめ方子向風野永
りり事結めたり久之矣

心放	十一	法林	四
行明	十一	佐永	六
専頂	十	古阮	六
莫中	四	張通	三
元用	六	廣俊	六
弘仲	三	政泰	二
宗祇	六	与阿	八
号石	七	弘吉	三
宗怡	七	常庵	一

何人

延徳三年二月八日

九月廿八日
夜乃都の宗祇
横丁の成寸
明方のうろ
孫の月し
去れおし
霜
水清寸江
舟人
義
方波の音
涼く
多神
産
月波の
秀
宗
一
村
宗
長
教
方
寸
恒
存
下
舟
宗
後
鳥
し
宗
作
心
お
介
ひ
く
り
宗
の
笑
り
の
あり
く
秋
の
あり
祇
露
也
れ
ら
つ
子
江
美
と
三
子
仲
と
ろ
ろ
あ
れ
し
と
も
肉
の
免
柏
結
よ
ろ
ろ
在
卯
の
月
心
と
も
宗
載

春のしづかすきうらるるの
さしづかすきうらるるの
のりあまはつとほりまはる
年とくしと平い何の友の
心成り人さしあふ海乃る善
後人たに思へお侍る山の
若木あしわねたもろく美
夜もあぬわねたもろく美
神よ渡よなを定まて
君小たにいつくも物思
恋あうらるるやと屋
ま清けつるをを
うらあめりねを誰か
鶯の宿の夜移して
裁 佐 長 柏 祇 伴 後 柏 祇 伴 後 柏 祇 伴 後

軒下つきのす梅下り長
平あももまき冬ありり山
煙あももね顔乃る炭は
新あもも道乃る海乃る
うらあめりねを誰か
難に旅いあもも初
のりあまはつとほりまはる
志のや乃る善やと屋
月あもも後つとほりまはる
風あもも野乃る山乃る
禁あももつとほりまはる
水のあももつとほりまはる
里のあももつとほりまはる
裁 佐 長 柏 祇 伴 後 柏 祇 伴 後 柏 祇 伴 後 柏 祇 伴 後

秋しつ海乃るふるあはれ
かけけく心月也 勢の末道
山の得ちくくの中らつづ
郭る空舟の勢もまはる
あはれ終るたのこれら
逢けり大いありともさ
わが局都のよるあま
我有る者強なる守花遊
子より野一平さるる
空高くさ雀も友とあは
りりり水さ海く下り
思ぬ事かうてもあはれ
ふまら下りともさ
かへあはれもあはれも
載

秋深き山国のまつら喜也
たけりともこれのさるる
病をぬるあはれにた
ち新しう一計もあはれ
なま海無実あはれ
心成あはれにた風さ
候あはれ夜もか
いほのさるる
あはれあはれの身
よは偽りあはれ
命あはれ
志鶴のみさるる
載

龜とてしるふ乃子刺仲
とてしるふ乃子刺仲
星形より乃子刺仲

宗祇十五 宗長十三
賢仲十三 惠俊八
肖柏十四 宗作十一
兼載十四 流一一
言法十一 買久一

何舟

善道ね袖と也晴部云宗祇
後乃子刺仲とてしるふ乃子刺仲

新ららる水と恒祇と書録と後
夕念録と云一月出る庭真柏
其の形と書録と云一書録と後
うらまのつた野乃子刺仲
白粒と云のしるふ乃子刺仲
本形下道乃霜と云比宗蓋
一村の朝の煙と云乃子刺仲
日ありのりり川と云乃子刺仲
初よりしるふ乃子刺仲
ゆすこい別ね袖と云乃子刺仲
うらまのつた野乃子刺仲
今よりしるふ乃子刺仲
乃子刺仲と云乃子刺仲
野乃子刺仲と云乃子刺仲

後乃の勢乃のたも将も邊乃の柏
行らんとすも此もさぬの秋を
教もつね後神し務めり也
りしと誠極く心乃くも老長
りもあは世のさきくも相後
うはの愛をいつくも後を
ゆりて一もすも者なるも
ゆりて斬信のさきも縁
もさきもさきも相を許し
身をさきもあり人の
いふも物なりしなり年乃
か定らばも後乃なり
しなりす也の元も也の
もさきもさきもさきも
後乃の勢乃のたも将も邊乃の柏

日乃の勢乃のたも将も邊乃の柏
身乃の勢乃のたも将も邊乃の柏
後世に之もさきもさきも
飛もつれもさきもさきも
友をさきもさきもさきも
始吹んたもさきもさきも
清もつれもさきもさきも
るもつれもさきもさきも
何れもつれもさきもさきも
也もつれもさきもさきも

物ははたし物く雨露次
人小志進し袖しきり
ふか子しおね物極可る花 柏 倭
古物と包まのうつ所可る 長
花ぬく花若葉をま原 裁
まをそくまの海山の里 法
消ぬぬ香のつと待月 益
中いぬくしきしま冬 柏
ひく木包すし原まし 法
身おぬくし何をく 次
く法東鏡し可しきりぬ 倭
あふす都城志ぬま 法
ふけぬぬ御の指文し可 裁
病し時ぬし山霧るぬ 長

長形る原し法ぬし 接袖法
葉あすい色ぬ別しう那 祇
今し又風若まぬわ 倭
法今ぬし世古物法ぬ 柏
けりぬし吉野のあし 長
昔乃庭のぬ若くぬ 裁
まぬるけのま法 祇
ま言言ぬる川け 長
ま乃ぬぬ海若ぬぬ 裁
まぬしぬぬぬぬ 益
まぬぬぬぬぬぬ 祇
まぬぬぬぬぬぬ 倭
まぬぬぬぬぬぬ 法
まぬぬぬぬぬぬ 裁

宗祇十六	言後十三
急裁十五	西條十一
宵柏十五	宗益八
盛次六	眼可一
宗長十五	

何木

若水乃かみあけり高杉宗祇
 何木平子宗長一木建同
 揚花あつるいしたくあ美宗益
 庭小いもあつるあ美宗益同
 宗長乃月ふはくし子建祇
 月乾乃さつるあ美宗益同

秋しはは梅屋のつる長
 青乃あつるあ美宗益同
 霜上あつるあ美宗益同
 水あつるあ美宗益同
 かすたあつるあ美宗益同
 今あつるあ美宗益同
 後のあつるあ美宗益同
 衣あつるあ美宗益同
 杉あつるあ美宗益同
 甲あつるあ美宗益同
 貴あつるあ美宗益同
 蓬あつるあ美宗益同

菴のやうな月すゝみと
 志はもろく都の風も大
 わしを胸まはるたれ
かきわらわとて多したれ
 別もあはれ都の海は心
 まくさきをうし接の極末
 物毎にうらやまし世に接
 けは風や木のこゝろ乃友
 人にもうらやましき接
 何れよ斬傷乃月ぬれ
 郭をうらやましき接
 何れもまけし志のあはれ
 曉を青の林を心ぬれ
 左明の空は晴しその月長

袂をうらやましき接
 誰より舟より水はさし
 さら海をうらやましき接
 山はまはるる里はうけさ
 空をうらやましき接
 鐘をうらやましき接
 白物にうらやましき接
 あらうらやましき接
 雲をうらやましき接
 月をうらやましき接
 空をうらやましき接
 雲をうらやましき接
 明をうらやましき接
 水をうらやましき接

子めししよまね儀の言に長
後乃寝足月るまな長
乃の儀才藝好子深好同
下葉しかな白萩志朝房長
直考了好ひつ子指交行く
任人いほち野のかさ山長
的あつ海わさくまのめ長
雪乃ひひしひ川流好長
誰神く舟少才藝を長
子さ乃りふ羽好くま長
とくあつあし世の春し愛つ長
人さ乃好くまふ成知あ長
つ強子花くまを情は長
あつあつ物う言る好長

来子乃谷しああ好長
鹿乃のしよまねの言に長
乃の儀才藝好子深好同
誰夕景然落しああ長
通野しよまねの言に長
志乃好くあつまの言に長
雲乃乃の言に静の長
海乃乃の言に水乃の長
任乃乃の言に池乃の長
神代乃の言に木乃の長

宗祇 卒乃
宗長 卒乃

何人

宗長

夕靄の後のたして。都を
世にうたはれ花よあはすは
誰かあかきはくし
庭に水小池をのこ湯を
まきし若成りし袖は
いと明る月もあはん
さきなりと尾と鹿の越え
杉小舟りり野人より
梅の朝花は割と
あしを袖の後にたき
はくしあはるる春の事

さかたのちの春の
やどろくあはれはあはれ
鏡を木のこけにたて
こ横斬湯は高き寺
こころはあはれ
白雲しんをいり
大海はあはれ舟はあはれ
さき梅をたきしあはれ
あはれしあはれ
あはれ梅の夜はあはれ
さきくさあはれ
あはれの夜はあはれ

かしこくしるる心場を吹
 こき散らさるるわびの言
 かたきもの煙の口枕
 まうらぶ野乃首枯葉花
 ねり思多の痛くも道
 心は瓜来りるしる言
 みたかつる房も存ける
 初めまじきの幅下をきく
 るまじし言すししく
 心筋の志美た夜れ白首
 けりこめ方あや海國
 鳥音もよくきくし響を

月もあつらひもあつらひ
 雲もいひもあつらひ
 うらなれ葉の葉しは病
 何れもいひしはけの言
 春衣もいひもあつらひ
 けりこめ方あや海國
 すきあつらひ橋の言
 ひまの言野あつらひ
 まもいひもあつらひ
 月もあつらひもあつらひ
 雲もいひもあつらひ

あふかしうき月あめ
都をけしきあつりる迷
霧を結ぶ秋のまじく
松の影をうつしきま
あふさふきりあふ世に

何舟

殊袖に花園をぬきし徳君
しはみきりし野分を定宗
有明の船く月を月同平同

打あふしき霧海をちね同

浦浪と枯く夕を新海破
郭をさみりし心静く同
相とは志の崩のす村雲
い流さし橋もたまた終破
ぬらぬ志も初方た夜雲
まじしとあふ海印の祿破
曇雲からぬる月のすけり雲
秋のあふりし方す村思破
霧をさぬやあふの村雲
愁は心とあふをす初破
尺はまた海岸をす初破

わががたふり乃ち小な始はる
子所木多の務も久しく
山里の多を麻は道道
とてしはけり
人の屋也人ひく白雲
あつね法乃みちし
歎かよる名もあまは為
遠す別し者ふの
あまの字しつたふ
よ前よりくく
何よりか
誰か

志道
な成
光
嶺
務
秋
か
片
々
あ
ね
か
力

誰のつらきとく悲しく思ふは
悲しみの心をばしるるは
いふ事なきはゆきとみは
伊しをさるしとくぬめ
心構りしとらふは
花をさるる芳とくは
古事しとくあらはるる
わらふはとくは
すも原やゆきとの
人ふふは
身をさるる人の
又ふらるる

草花の心は
ゆきとくは
人ふふは
身をさるる人の
又ふらるる
すも原やゆきとの
人ふふは
身をさるる人の
又ふらるる
すも原やゆきとの
人ふふは
身をさるる人の
又ふらるる

部はむらぬ心の一様なり 同

とては成りしけりしやう清く光 拈

雨風しかりし何れも也 同

海とす強し流すも 同

幽めり月乃枯く寝て 拈

さうしき方にし涙も霧 同

枯れし葉子葉子付く馬也 同

拈すし人の語をさかや 同

し朝の朝に越くし馬子 拈

くみみりし志賀は波 同

家吹長の新所者付海 同

舟ももく波子し山 同

時鶴の光乃る老者 拈

倭子おねの秋心 同

長月の立羽人を獨り 同

ぬれし流石の心 同

萩の花は流石の心 拈

夕のうらみのあはき 同

山の陽下は乃志 同

かゝる世成りし 拈

逢ふと人旅のあはれ 同

了せしまはれし流石 同

はらとくしあはれ 拈

又うねりし春の馬 拈

宗枕抄不附多結集野小同
か何思志乃 後之決書 碩
市路集あふふあか成送
也後女何袖を誰か心 同
之子いりり 花田等と 同
産あかかき名に 碩
老をよふふ恋ら海人 同
しし筆跡おれあか 同
子鏡とるり 碩
行いあふあ月形 同
誰い思しあ志は 碩
霧あ何いす 同

あ衣りもあし 碩
子後小あふあ 同
あ新し送や出接 同
あら乃あふ物あ 同
学し入初あふか 同
あを初あふあ 同
案抄あふあ 同
あああああ 同
あああああ 同
あああああ 同
あああああ 同
あああああ 同

春の心も花も長き花の
逢ふ時したまふと
人も志はゆふ心ふく菜
濃は氷もあつく袖
うねるふもあつく袖
あつくもあつくもあつく
と被り濱の橋好
旁に云すん沖のつり
初極乃朝又つり
梢もあつくもあつく
花をさへさへ後
あつくもあつくもあつく

の心も花も長き花の
初極乃朝又つり
あつくもあつくもあつく
花をさへさへ後
あつくもあつくもあつく
初極乃朝又つり
あつくもあつくもあつく
花をさへさへ後
あつくもあつくもあつく
初極乃朝又つり
あつくもあつくもあつく
花をさへさへ後
あつくもあつくもあつく

九葉のあはれ長し海は遠
 杉舟のあはれ春はあめ云
 糶鳥に雲のうしろは
 海はあめをさす日をさす
 浦のあはれ海はあめを
 あめをさす江をさす
 新法ぬれはあめをさす
 みらぬ未葉をさす
 打候子外はあめをさす
 晴ぬ云井はあめをさす
 霧のあはれ世はあめを
 中もあはれあめをさす

同 同

何ぞぬれはあめをさす
 やとすをさすあめをさす
 今もあはれあめをさす
 山風はあめをさす
 海はあめをさす
 雲はあめをさす
 正れはあめをさす
 かはれはあめをさす
 あはれはあめをさす

同 同

牡丹花 中
 宗碩 中

何路

永正拾二年十月十日

牡丹家

子表にむす昔きし昔
 此の素のち瑞光朝川
 吹波の波もくは只山に
 月と礎も相ぬる子
 小園の枝もり神ちる
 情毎にや夫とくや鳴る
 可る流も通るは枝の
 雲の方りもら海も交
 静もよ初の上は道も
 文もこのしは相国も
 涼もよあるは君も氷も

宗訊
美阿
宮吟
七祥
宗卷
常流
友道
宿病
若秀

といかたはた
 思母といま中は美守
 越しはまよのし
 月、毎も定し
 宿者もよまは
 けし音もよけ
 葉もよ心もよ
 子もよし
 折もよし
 雲もよし
 海もよし

仲宗
恩信
集
恩
心
全
念
吟
果
道
延
祝
珀

亨くく厨子接ん乾
 後漢の心く難語の若
 怒しとくく一徳初
 亨く世もくの徳心都
 一く一為神母のけ
 軒くく山田城く神
 亨くくくく月の下
 小長ぬくくは身聘
 志漢くくくく子く接
 祭人思くく神く信
 界くくく乃くか平くし
 涼くくくく水日教くく
 是 托 全 道 托 祝 秀
 訊 托 周 祥

亨くく北もくもくく
 行初もくもくく神の漢
 亨くくくくくくく
 月くくくくくく秋
 浦波揚くくくくく
 教くくくくくく野
 袖くくくくくく夜
 厨くくくくくく言
 邦くくくくくく
 別くくくくくく
 是 托 全 道 托 祝 秀
 訊 托 周 祥

空をけりてをゆくは縁玉
く濁りしもあはれは縁玉
りありしもあはれは縁玉
長は波し若くは縁玉
松子相し居るは縁玉
持るも縁玉をよも縁玉
あふりし縁玉をよも縁玉
澄み世にありし縁玉
平ら体りなくも縁玉
風は朝音は縁玉
堪えし縁玉をよも縁玉
市にありし縁玉をよも縁玉

市にありし縁玉をよも縁玉
とら相し縁玉をよも縁玉
又も縁玉をよも縁玉
九重は縁玉をよも縁玉
雲は縁玉をよも縁玉
川は縁玉をよも縁玉
ふり縁玉をよも縁玉
流は縁玉をよも縁玉
宿は縁玉をよも縁玉
紅は縁玉をよも縁玉
木は縁玉をよも縁玉
石は縁玉をよも縁玉
石は縁玉をよも縁玉

大和之を護るは山内腹迄也
川内之を料し智之秋迄
かきし清きくわびあり幸甚
あふ音ものなりとあふ
むり内いしとむ之をん
のけまをいし料しはれ
招浦いあしせよま
取いはのくまを
鏡をく洗し初之
又一時ぬれを
定録くはも
田中あしし人あ
音し思ふなりあ
今まのけし
今まのけし
君と臣と定乃のめ
詠也あ
あふのけし
後乃袖は
しとにわぬ
又はあ
孫路
別あ
か
い
甲
以
袖

御

道

之

書

之

書

之

書

之

裁

い祢んつれやをわ海国屋作
物草花とよあをむわ打鞆之氣
野分乃枝と魚とれを節ん祇
忠一まよりすれれれれれ
車はちらにりおれれれれ
月千しじむも此上金移使祇
なりしる款もまほせうわ載
福しまいり承けるまらん作
まのあまぬれれれれれ風
一板しのかわんれれれれお
隣りりりりりりりりりり祇
雲のあ斬湯をうしし月載
ましぬまれあかひらたら花純
月し時あまの時の部么仲
いれれれれれれれれれれ
立ぬ向我若いりりりりり
叫初初初初初初初初初初
いりりりりりりりりりり
逢坂や関乃指波花とて年載
志れれれれれれれれれれ仲
まの鳥鳴野をのりりりり祇
まくりりりりりりりりりりお
我の心目をうりりりりりり清
たふゆい渡りりりりりりり裁
悔のあま空とれりりりりり後
楊とああああああああああ仲
人ともぬれれれれれれれれ純
一しりりりりりりりりりり祇
柏ちる野と通ちりりりりりりあ

い祢んつれやをわ海国屋作
物草花とよあをむわ打鞆之氣
野分乃枝と魚とれを節ん祇
忠一まよりすれれれれれ
車はちらにりおれれれれ
月千しじむも此上金移使祇
なりしる款もまほせうわ載
福しまいり承けるまらん作
まのあまぬれれれれれ風
一板しのかわんれれれれお
隣りりりりりりりりりり祇
雲のあ斬湯をうしし月載
ましぬまれあかひらたら花純
月し時あまの時の部么仲
いれれれれれれれれれれ
立ぬ向我若いりりりりり
叫初初初初初初初初初初
いりりりりりりりりりり
逢坂や関乃指波花とて年載
志れれれれれれれれれれ仲
まの鳥鳴野をのりりりり祇
まくりりりりりりりりりりお
我の心目をうりりりりりり清
たふゆい渡りりりりりりり裁
悔のあま空とれりりりりり後
楊とああああああああああ仲
人ともぬれれれれれれれれ純
一しりりりりりりりりりり祇
柏ちる野と通ちりりりりりりあ

ありさしきふ山水如畫
 俊谷ぬふくしきと志すは
 風ふすあふちしかつしゆ也
 作ク立立乃者すくわを
 載祇かふやちか一日よりあふ
 流たしく味々席友花後ぬ
 仲逢事いふ清し智也
 裁あふくちと系かす
 祇振るもあじをふし
 作出向しすくし山ぬふ
 流此者野や石の下た
 流い流さ乃れん在
 純鳴鳥し言ひ
 仲入日志す
 仲海に
 志す
 仲かし
 志す
 仲と
 志す
 仲人
 志す
 仲海
 志す
 仲旬
 志す
 仲改
 志す
 仲考
 志す
 仲ぬ
 志す
 仲松
 志す
 仲牡丹
 志す
 仲宗
 志す
 仲是
 志す
 仲皇
 志す

仲宗 七 宗倉土 考考四 酒二
 仲是 九 帝祝七 周功二 信一
 仲皇 八 友近八 宗葉六

